

## 「四人の友を天に送る」

2019年07月22日

6月と7月の2ヶ月間に、4人の友を天に送った。二人は「9条の会」のメンバーであった。S・Kさんは、喉頭がんと聞いていたが、お元気そうで、私が一時退院していた時、いつもの笑顔でお見舞いに来てくださった。芸術的センスのある方で、9条の会の催しの時は、展示物を見栄えよく、整えてくださった。事務局のメンバーとしても活躍くださっていた。抗がん剤治療ができなくなったそうで、急逝され、驚いた。お見舞いに来られた彼女が先に亡くなられ、見舞われた私が生き残った訳である。

もう一人はI・Tさんで、三年前、9条の会の例会で「平和の語り部」として、話している最中、突然、口が利けなくなった。以前、脳梗塞で倒れたことがあると聞いていたので、脳梗塞の再発ではないかと、直ぐに救急車を呼んだ。命はとりとめたが、半身不随の後遺症が残った。幾度か、訪問したが、奥様やご家族に看病され、平穩に過ごされていた。家族の世話になるばかりで、心苦しいとも言っておられた。二人とも私と同じ年であった。9条の会は、比較的高齢の方が多いが、二人が居なくなり、寂しい限りである。

三人目は、西堂静子さんで、妻の妹であり、4人兄弟姉妹の末っ子である。去年3月に子宮がんと診断され、手術、抗がん剤治療を受け、経過が良いと聞いていたが、再発した。腹水が溜まるようになり、1年3ヶ月の闘病の末、68歳で天に帰られた。彼女は、私の病氣治癒を聞いて、涙を流して喜んでくださった。妻は一番年若い彼女が先に逝くことを嘆き、どれほど泣き、祈ったことだろうか。葬儀は弔辞を受けずに、彼女が書き残したお別れの挨拶を娘さんが代読した。牧師も彼女の信仰を披瀝し、夫も涙ながらに、妻への思いを述べられた。信仰に生きた彼女の生涯を、会葬者は知らされ、私が体験した葬儀の中で、最も感動的な葬儀であった。神を信じて生きることが、どんなに豊かであり、そして、平安に召されていくことかと思う。素晴らしい伝道になった。

四人目は、山本将信牧師である。彼は、私のことを紹介する時、「秋吉君の良いところは私の影響で、私の悪いところは秋吉君の所為である」と言っていた。神学校の寮で同室となり、以来60年近い、交わりを持った、まさに旧友であった。鈴木正久牧師が伝道・牧会していた西片町教会を引き継いだ。その頃、学生運動が吹き荒れ、礼拝が守れなくなり、分散礼拝を行っていた。彼は深く苦しんでいた。タフな彼は混乱を乗り越え、西片町教会で20年くらい活躍し、韓国教会との関係を深め、韓国の民主化運動を支援した。辞任後、キング牧師を学ぶため渡米した。そして、1年かけて米国を車で旅し『アメリカをたぐる』をいう本を著した。ハワイ州とアラスカ州以外は全て走ったそうである。その後、信州の岩村田教会や、篠ノ井教会で働き、休耕地を借りて、農作業を「エキサイティングだ」と言って、楽しみ、収穫を山谷などに送っていた。彼は多くの友人に恵まれた。友人たちとログハウスを建て、彼らとの多彩な交わりを楽しんでいた。彼の自由さとエネルギーに敬服してきた。数年前、大腸がんになり、闘病が始まった。闘病中も、農作業と集会を続け、伝道誌『おとづれ』を出し続けた。彼は「死ぬ時は、がんがいい、死期を知ることができるから」と言っていた。がんは転移し、厳しい痛みを伴うものになっていったが、奥さんと三人の娘さん家族の篤い看病を受け、淡々と過ごしていた。同級生の寺島昭二牧師から、永眠の知らせを受け、言いようのない悲しみに襲われた。私たちの年齢になると、友人たちの訃報を聞くことは避けられない。4人の訃報に接した悲しみの中、今を誠実に生きることを諭された2ヶ月であった。